

記念誌「相中相高百年史」 ” 思い出の記 ” より

” 汽車通学の伝統 ” 旧音楽室でのこと

中40回卒 大澤 英男 (※1)

去る七月四日、約六十年前の相中時代を思い出しながら、原町駅から電車に乗って、相馬駅に降りた。すっかり変わった街並みを通して、昔の通学路をゆっくりと歩いてみた。

大正末期に生まれた私たちは、大凶作と経済恐慌、大変な不景気の時代に育ち、もの心ついてからはそれこそ戦争の連続であった。『満州事変が小学校入学の時、支那事変が相中入学の時、そして中学五年卒業間際には、大東亜戦争の勃発』と、文字通り戦争のために教育されたといっても過言ではない。

疲弊しきっていた農村から、自動車賃と授業料を支払って教育させるには、育英制度もなかった当時としては並大抵ではなかったと思う。ただ当時、伝統有る相馬中学に合格する人は原町近在各小学校の優等生クラス一・二名であり、親も本人も大きな誇りであった。

入学後何日かして、『原町方部の汽車通学生は放課後旧音楽室に集まれ！』の連絡があった。何事かと思ったら、『汽車通学の心得を上級生から教えられる』とのことで、恐る恐る校舎最北端東側の旧音楽室に入ってみると、最上級生の五年生が肩をいからして立っていた。その中に四年生以下汽車通学生全員（約百五十名位か）正座させられた。通学心得はいって常識的で、例えば

- 一、上級生には敬礼をする。
- 二、服装は決められたとおりに。
- 三、年寄り目上の人には席を譲れ。
- 四、前二輛は中学生、後二輛は女学生。
- 五、駅から学校までの通学路も男女別々に。
- 六、途中買い食いするな。飲食店に入るな。映画をみるな。

等々。当時の軍国主義、儒教思想からすれば当然の事であった。ただ、この旧音楽室での指導は大変厳しいものだったので、初めて経験する一年生の私たちは非常に恐ろしさを感じたものだった。例えば、五年生の代表が

「上級生に敬礼をする」の説明、後席や両脇にいる五年生から

「敬礼をしない不心得者がいる！」 「それはだんじゃ？」（誰だの意） 「出て来い、つまみ出せ！」

の罵声と共に、バシーンという音。剣道のしなないで教室の腰板や床をたたいて威嚇する音に思わず後を振り向くと、

「うしろみんな！」（後を見るなの意）の怒声。普段上級生に対して、生意気な態度を取っていた者は前に呼び出され、殴られることも度々であった。しかし、それを止めてくれる上級生も必ずいた。次に、

「服装の悪いものがある。」それは、カラーのないもの、ボタンやホックを外している者、帽子にミシンをかけ油を塗ってテカテカと光らしている者、等々のことである。

「だれだ、つまみ出せ」怒声、罵声、威嚇するしなないの音といった具合に、震えながら聞いた最初の経験であった。

毎年、年度はじめに恒例として、或いは規律が乱れた時などに下級生を厳しくしつけた。それは、やがて最上級生になると、伝統を重んじながら下級生を指導する責任を感じていたからであった。

従って、「上級生は怖かった」と、今でも馬城会原町支部の総会の度ごとに聞かされる言葉である。しかし、これが相中生の誇りと伝統を育てた基になっていたと思う。

朝夕一時間ずつの汽車通学は、勉強に励む絶好の場であっただけでなく、将来を論じあう大切なコミュニケーションの機会でもあった。生涯忘れぬ友情が生まれ、今なお忘れぬ青春相中時代の思い出の一コマである。

(※1) 昭和17(1942)年卒 高平出身